東京五輪　赤川次郎さんインタビュー

写真は『週刊金曜日』7 月 23 日号の作家赤川次郎さんインタビュー。同年代として共感することも多く、発言を抜粋して紹介したい。

五輪が終わったあと、日本にとんでもない（コロナ感染の）状況が残ったらどうなってしまうのだろう。また、「東京五輪株」という新しい変異株がでてくるかもしれないし、それを世界各地に五輪の選手や関係者が持ち返ってしまったらどうなるのだろう、と考えてしまいます。

去年、最初に緊急事態宣言を発令してから 1 年以上経ったわけですが、この間何をしていたかというと、本当に何もしてない。（その原因はどこに）何もしなくても政権が安泰という状況があるからでしょう。「こんなことしたら政権を失う」とか政治家が危機感を抱けばちがうのでしょうが、何をやっても、「選挙になれば勝つ」と考えている。

本来スポーツは健康に寄与するものですが、今回の五輪はいのちを危険にさらす矛盾したものになっています。これほど不健康な五輪は初めてじゃないですか。戦争と比べてはいけないのかもしれないけれど、戦争のときと同じなのは、責任の所在が曖昧なまま突き進んでいることです。後でとんでもないことになったら、菅首相は「開催を決めたのは IOC だから」と言うだろうし、IOC は「日本が大丈夫と言ったから」と言うでしょう。誰が責任をとるのか、誰も言わない。そういう人たちが日本という国を動かしているのかと思うと、情けないです。他の国であればとっくに中止になっている。

（あえて積極的な意味合いを見いだすとすると？）五輪の正体、それがいかにカネまみれのものなのかを暴いた、世界に知らしめたことは大きな〝功績〟と言っていいでしょう。それと五輪が絡むと国内の問題も海外で報道されるので、日本の政治がいかに何も決められないかということが、世界的に知られるようになったことも重要だと思います。たとえば森喜朗さんの女性差別発言が、いままでは国内だけで笑い話ですまされていたのに、そうはいかなくなったことです。日本の政治のレベルの低さが、世界中に知れ渡ってしまうことは悲しいことでもありますが、事実だからしょうがない。それをきっかけに、国民の間に「これじゃいけないな」という思いが生まれればいいと思います。

何とか大したことなく終ってほしいと思います。とんでもなく感染者数が増えると、中止になるかもしれないけれど、その分、犠牲者が出るわけだからそれを望むのはよくない。しかし一方で、そうすると「結局大丈夫だったじゃないか」となって、これだけ問題が露呈したにもかかわらず政治は変わらないかもしれない。そういうジレンマはありますね。

私たちにできることは、やはり選挙に行って、そういう政治家を落とすことだと思います。そこに尽きると思います。

（2021 年 7 月 27 日）